The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世末期口語における～テゴザルと～テゴザッタ : 中世語動詞のテンス-アスペクト体系の一斑
Author(s)	福田, 嘉一郎
Citation	詞林. 1992, 11, p. 61-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67320
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中世末期口語における～テゴザルと～テゴザッタ
――中世語動詞のテンス－アスペクト体系の一斑――

福田 嘉一郎

0　はじめに

本稿では、前稿[注1]に引き続き、中世語の動詞のテンス－アスペクト体系を論ずる一環として、中世末期口語（以下単に中世語とする）における動詞の尊敬／丁寧体である[注2]、連用形＋テゴザルの形式（「上げてござる」「読うでござる」「習うてござる」等。以下～テゴザルとする）と連用形＋テゴザッタの形式（「上げてござった」「読うでござった」「習うてござった」等。以下～テゴザッタとする）について考察し、その文法的意味を明らかにしたい。特にこれらの表現形式に限定してとりあげることが、中世語の動詞のテンス－アスペクトを体系的に記述する上でどのような意義をもっているかは、本稿の最後で述べるつもりである。

1　取り扱う資料と考察の対象

1．1　まず本稿で取り扱う資料であるが、中世末期～近世初期の口語を反映するものとして、キリシタン資料から天草本平家物語（1592年刊）、天草本伊曽保物語（1593年刊）、コリャード懺悔録（1632年刊）を、朝鮮資料から初本捷解新語（1676年刊）を、国内資料から大蔵虎明本狂言集[注3]（1642年写）を、それぞれ選んで調査することにした。また天草本平家物語は、その原拠本についての研究が進められてきている[注4]。本稿では天草本を原拠本と対比する場合、現在までの研究成果に基づいて、斯道文庫蔵百二十句本[注5]を以てし得る個所、すなわち天草本巻Ⅱ第二章～巻Ⅲ第八章（pp.107-196）および巻Ⅳ第二章以降（pp.228 ff.）から引用する。

1．2　次に、本稿での考察の対象となる表現形式を規定しておく。第一に、ここでとりあげる～テゴザル・～テゴザッタは、元来の構成が動詞[注6]連用形＋接続助詞テ＋存在動詞（＋タ）である形式に限られる。したがって、形態は連用形＋テゴザル、テゴザッタであっても、その中のゴザルが行ク／来ルの尊敬語と認められるときは、考察の対象としない。例えば次のような場合である。

（1） このほどは屋島へござるとこそ承ったに，荷としてこれまでつたへてござったぞ？（天草本平家、p.310）

（2） （後家）「お新発意たちは、連立つてござらぬか （住持）「いや今夜は、檀那衆のお出でゞ、客がおじやれども、みどもはまいつた、それで誰も連れてまいらぬ（虎明本狂言、寝替、下 p.218）

例(1)は原拠本の、

（3） 此ノ程ハ・屋島ニ渡ラセ玉フトコソ・承テ候ヒツルニ・何トシテ・是マテ伝リ玉ヒテ候ヤラン（斯道文庫本平家、p.598）

に対応するものであり（移動する意の伝ハルと、伝え聞く意の下二段伝フとの取り違えであろう）、また例(2)では後家の問いに対して住持が「連れてまいらぬ」と答えており、いずれのゴザルも来ルの尊敬語であることがわかる。

第二に、本稿では文末の～テゴザルと～テゴザッタ、例えば、

（4） 次にまた刀の儀はやがて身内にあづけおいてござる（天草本平家、p.9）

（5） 上は鞘巻の黒う塗ったに中は木刀に銀箔をおいてさされてござった.（同、p.9）

のようなもののみをとりあげることとし、従属節をつくる、

（6） 私が相伝の主殿忠盛をこよひおのおの闇討ちに召されうとあることを伝へ聞いてござるほどに（天草本平家、p.5）

（7） さうあって忠盛は御前で舞はれてござったれば（同、p.5）

などの例は除外した。中世語における～テゴザルと～テゴザッタの文法的意味は、テンスの問題に深く関わっていると筆者は予想するのであるが、現代語において従属節の述語は、ときに文の述語の場合と異なったテンスの形式をとる（いわゆる相対的テンス）注7。このような現象は中世語にも共通していた可能性があり、もしそうであったとすると、～テゴザルと～テゴザッタについても、（中世語の従属節一般を何種類かに分類してそれぞれの文法的特徴を吟味することなく）従属節をつくる場合を文末の場合と同様に考えるならば、混乱に陥る結果となる。こうした危惧から、考察の対象を一応文の述語に限定しておく方が無難と判断したのである注8。

ただし、トがうける引用節の中の言い切る述語は、文の述語に準ずるものと見なす。日本語の引用節には、節中の述語自体の形式による直接話法と間接話法の区別がないからである。つまり、引用節中の指示語などから、直接話法と解釈されるときは勿論のこと、たとえ間接話法と解釈されるときでも、節中の言い切り

の述語がテンスに関してとる形式は文の述語の場合と同じであり、ただその基準時点が主文の発話時ではなくて、常に引用節の発話時なのである[注9]。もっともこれも現代語についていえることであるが、古くは引用節中の述語が、文の述語の場合とは形式を異にしたという事実は聞かないので、上のような措置をとっても許されると思う。

2　天草本平家物語に見られる～テゴザルと～テゴザッタ

2．0　本稿では、中世語における～テゴザルと～テゴザッタの意味を明らかにするのであるが、～テゴザッタの用例は数が少なく、天草本平家物語以外の資料からは、天草本伊曽保物語の１例、コリャード懺悔録の２例、初本捷解新語の１例、虎明本狂言集の１例の、計５例を得る程度である。そこで、～テゴザッタがまとまって見られる天草本平家物語を中心に考えてゆくことにする。他の資料の～テゴザル・～テゴザッタについては、第３章であわせて考察したい。

2．1　天草本平家物語を国語史の資料として取り扱うにあたっては、原拠本の表現からの影響に注意しなければならない。不干ハビヤンによる天草本の序文に「この物語を力の及ぶところは本書（ほんじょ）〔原拠本〕のことばをたがへず書写し」とあるごとく、その口語訳に際しては原拠本にできるだけ忠実であろうとした態度がうかがえるといわれており[注10]、～テゴザルと～テゴザッタの使い分けについても、原拠本の何らかの表現をなぞった結果なのではないかということが、まず問題になってくる。しかし、次の(８)～(11)のような対応例を見るかぎり、そうした観点からは説明できない現象である。

(８)a.　義経・殊ニ憤リ申レケレハ・サラハトテ・ツイニ・渡サレ・獄門ニソ懸ラレケル・見ル人・河原ニ市ヲ成ス（斯道文庫本、p.566）

b.　義経ことに怒（いか）り申されたれば，さらばとあってつひに渡された：見る人河原に市をないてござる．（天草本、p.286）

(９)a.　七八十・八九十ノ者共モ・世ノ滅スルナント云事ハ・有声ニ・昨日今日トハ思ハサリツル物ヲ・コハイカニセントテ・叫嘆フ・是ヲ聞テ・少キ者共モ・泣悲ム（斯道文庫本、p.725）

b.　七八十，八九（はっく）十の者どもも世の滅びうずるなどといふことは，さすがきのふけふとは思はなんだものを：こは何（なに）とせうぞとをめき叫べば，これを聞いて若い者も泣き悲しうでござった．（天草本、p.367）

(10)a.　今度・三井寺ニ寄セタランズルニ・余ハシラス・相構テ・先・競（きそ）馬・生捕ニセヨ・鋸ニテ・頸キラントソ宣ヒケル（斯道文庫本、p.263）

b.　今度三井寺に寄せうずるに，余は知らず，かまへてまづ鬻めをば生け捕りにせい，鋸で首を引かうと言はれてござる．（天草本、p.120）

(11)a.　去程ニ・平家ハ・正月中旬之比・讃岐屋島ヨリ・摂津国難波潟ヘソ伝玉フ・東ハ・生田森ヲ・大手ノ城戸口ト定メ・西ハ・一谷ヲ・城廓トソ構ヘケル（斯道文庫本、p.504）

b.　平家は正月中旬のころ讃岐の屋島から津の国の難波へ伝うて，ひがしは生田の森を大手の木戸口と定め；西は一の谷を城郭にこしらへられてござった．（天草本、p.252）

（８）a.、（９）a.はいずれも原拠本の動詞の終止形であるが、（８）b.では天草本の～テゴザルが（８）a.に対応している一方で、（９）b.では～テゴザッタが（９）a.に対応している。また(10)a.、(11)a.はいずれも原拠本の動詞連用形＋ケリであるが、(10)b.では天草本の～テゴザルが(10)a.に対応している一方で、(11)b.では～テゴザッタが(11)a.に対応している。これらの例から、天草本平家物語に見られる～テゴザルと～テゴザッタは、ハビヤンが原拠本の表現にそれほど拘泥せず、比較的自由に口語訳した中で用いられた形式であると考えられる。

２．２　天草本平家物語は、序文に「この平家をば書物のごとくにせず，両人相対して雑談をなすがごとく，ことばのてにはを書写せよ」という「師の命に従っ」たとあるとおり、右馬之允・喜一検校なる二人の人物による問答体をとっている。そのため本文は、右馬之允の台詞と喜一検校の原拠本をうけた語りとに大きく分かれ、後者がさらに原拠本の地の文に相当する個所、すなわち語りの地の文と、原拠本の会話文（心話、書簡を含む）に相当する個所、すなわち語りの中の会話文（物語の登場人物の台詞）とからなるという二重構造をもつ[注11]。例えば、

(12)a.去程ニ・高倉院ノ御謀叛ノ由披露仕ル・法皇ハ是ヲ聞召シ・「由シナキ都ニ出テ・カク憂キコトヲ聞召ヨ」トテ・又御涙ニ咽セヲワシマス・大政入道・福原ノ別業ニヲワシマシケルニ・前右大将宗盛・脚力ヲ立テ・申レタリケレハ・大政入道・大キニ嗔テ・「別ノ子細アルマシ・宮ヲ・急キ・奉ニ搦取ニ・土佐ノ畑ヘ・流マイラスヘシ」トソ宣ケル……出羽判官源大夫判官ニ・此由ヲ仰付ラル……

（斯道文庫本、pp.248ff.）

b.　ＶＭ.「高倉の宮の御謀叛の様体をも聞きたい，お語りあれ．」

ＱＩ.「まづはさて退屈も召されぬお人ぢゃ．さらば語りまらせう

：高倉の宮の御謀叛の由を披露つかまつったれば，法皇はこれを聞か

せられ，『よしない都へ出て，またこのやうなうとましいことを聞く』とおほせられて，おん涙にむせばせられた．清盛は福原の別業にゐられたに，次男宗もりの方から飛脚をたててこの由を言ひ送られたれば，清.大きに腹をたてて，『別の子細もない：いそいで宮を搦め捕りまらして，土佐の畑へ流しまらせい』と言うて，出羽の判官と，源太夫判官にこの由を言ひつけられた．……」

（天草本、pp.107ff.）

（「　」、『　』は筆者）

の場合、天草本の『　』の外が語りの地の文に、『……』が語りの中の会話文にあたる。ただし右馬之允（ＶＭ.）の台詞と、喜一検校（ＱＩ.）の台詞で「語りまらせう」までの部分とは、原拠本と無関係な両人物の雑談である。

さて、これらのどの個所に～テゴザル・～テゴザッタが現れるかを調査すると、次のようなことが知られる。すなわち、天草本に～テゴザッタは全部で38例見られるが、それらは原則として語りの地の文にしか現れず、語りの中の会話文に現れる～テゴザッタは、

(13)　いつぞやまた召されさせられて今様を歌はせられたにも思ひ知られてこそござったれ．（p.105、仏御前→妓王）

の１例のみであるのに対して、天草本に137例見られる～テゴザルは、語りの地の文にも（65例）、語りの中の会話文にも（67例）、原拠本と無関係な雑談にも（５例）[注12]現れるのである。

まず～テゴザッタについて考察する。天草本における語りの地の文で述べられていることは、いうまでもなく「平家の物語」であり、それは右馬之允と喜一検校にとって、自分たちが生きている現在の世界とは直接関わりのない、遠い昔のhistoria である。殆どそうした個所にしか現れない～テゴザッタは、話し手と聞き手の構成する発話場面と直接関係のない過去の出来事を語る場合にしか、用いられないものなのではなかろうか。以下は、現在と断絶した過去の時を示す副詞句と共起した例であるが、このような～テゴザッタが現在から切り離された過去の事態を示していることはより明白である。

(14)　嘉応元年のことでござったに：一院は御出家なされてござった（p.13）

(15)　ある時法皇も御幸なされたれば，浄憲法印といふ人もお供せられてござった．（p.19）

(16)　十月の十三日には平家は駿河の国の清見が関へつかれてござった（p.

148)

(17) そのころある夜夜半ばかりに六波羅のあたりが大地もうち返いたやうに騒いで，馬に鞍を置き，腹帯をしめ，具足をき，東西に走りち迷うてござった．（p.177）

さきの例(11)b.もこれに加えられるであろう（「正月中旬のころ」）。このような観点で見ると、さきに語りの地の文に現れない例外とした(13)も、「いつぞやまたあなたがお召しを受けて、今様をおうたいになった時にも」という、現在と断絶した過去の時を示す副詞句をともなっていた。例(13)の～テゴザッタは、語りの中の会話文で用いられているけれども、仏御前が個人的な回想を表白するものであって（聞き手は妓王）、会話文の発話場面（仏御前と妓王とが構成する）とはやはり直接関係のない、会話文の発話時から見た過去の事態を示しているのである。

次に～テゴザルについてであるが、前述のように天草本の～テゴザルは、語りの地の文でも語りの中の会話文でも用いられている。それらのうち、語りの地の文に現れるものは、～テゴザッタと同様過去の事態を示していると考えられ、現在と断絶した過去の時を示す副詞句と共起した、以下のような例も存在する。

(18) それによって中ごろ権の師と申す人あまり色が黒うござったによって，見る者ども黒師と異名をつけてござる．（p.6）

(19) 都をば七月の下旬に出たれども，九月の二十日ごろにやうやうと鬼界が島にはついてござる．（p.73）

(20) まづその木曽殿はそのころ信濃の国におぢゃってござる．（p.156）

(21) その時みな色をそっとなほいて，頼もしう思はれてござる．（p.194）

語りの地の文に現れる～テゴザル（２．３で述べる「～ときこえ（まらし）てござる」24例を除く41例）と～テゴザッタ（37例）とは、互いに置換可能であるように見える[注18]。では、天草本に見られる～テゴザルがすべて～テゴザッタに置き換えられるかというと、これには疑いがもたれる。そのように考えたのでは、～テゴザッタの現れ方が充分に説明できないことになる。さきに見たとおり、語りの中の会話文では～テゴザッタが殆ど用いられていない。もし天草本の～テゴザルと～テゴザッタとが常にヴァリエイションの関係にあるのなら、語りの中の会話文における両者の比率が67対１ということにはならないはずである。

ここで天草本に見られる、次のような～テゴザルの例に注意したい。

(22) やがて消えいられたを膝の上にかき伏せ奉り，有王が参ってござる：多くの波路をしのいでこれまでたづね参ったかひもなう，やがて憂き目

を見せさせらるるかと，泣く泣く申したれば（p.86、有王→俊寛）

(23) 競が申したは：宮また三位入道殿も三井寺にと承ってござる：さだめて今は討手をむかへられうずれば，三井寺法師をはじめてよからうずる者をえり討ちにいたさうず：さりながら乗ってことにあはうずる馬を親しい奴ばらに盗まれてござる．お馬を一匹あづけくだされうずるかと，申したれば（p.118、競→宗盛）

(24) 平家の方に先陣をした忠清が大将に申したは：橋の上の軍は火の出るほどになってござる……今は川を渡らうずるでござるが……渡すほどならば，馬，人押し流されて失せまらせうず．淀一口へ向ひまらせうか？河内路へまはりまらせうかと，申したれば（p.129、忠清→知盛）

(25) 武蔵の国の住人猪俣と申す者ぢゃ：助けさせられい，平家すでに負け軍とこそ見えてござれ：もし源氏の世になったらば，御辺の一家親しい人々何十人もあれ，それがしが勲功の賞に申しかへて奉らうと申したれば（p.274、猪俣→盛俊）

これらはいずれも語りの中の会話文で用いられていて、語りの地の文に現れるさきの例(18)～(21)などとは異なり、現在から切り離された過去の事態を示しているのではない。(22)～(25)の場合、～テゴザルは客観的には以前に属する、しかし発話場面に直接関わる出来事をもち出すことによって、むしろ話し手と聞き手の構成する発話場面を解説しているのである。このように天草本の～テゴザルのなかには、語りの中の会話文に現れ、現在に結びつけられた以前の動きを示すものが存在する。それらが過去の事態を示す形式とどれほど違っているかは、上の(24)、(25)を天草本に見られる、それぞれ同じ成ル、見ユという動詞の連用形＋テゴザッタの例である次の(26)、(27)と比較するとき、端的に浮かび上がってくる。

(26) 馬には人，人には馬が落ち重なって，さしも深かった谷一つを平家の人数七万余りをもって埋めあげまらしたれば，血は川のごとくに流れ，屍は丘のごとくになってござった．（p.168）

(27) 法皇の御所になった寺には家のうちにはみな人がゐあまって，庭から門外までびっしと満ち満ちてゐたところで，比叡の山の繁昌門跡の面目と見えてござった．（p.197）

(24)、(25)の～テゴザルは、発話時から見て確かに以前に属する出来事、すなわち橋の上の戦闘が激しくなったこと、あるいは平家の負けがわかったことをも

ち出しているけれども、問題になっているのはそうした出来事そのものではなくて、出来事があった後の発話時の状況である。なぜならもち出された出来事は、（橋が渡れないので）忠清が知盛に対策を進言するとか、猪俣が（敗色濃厚な平家の）盛俊に助命の交換条件を出すとかいった発話場面に直接関わっているからである。これに対して例(26)、(27)は、語りの地の文で用いられており、話し手は喜一検校、聞き手は右馬之允であって、～テゴザッタが示すところの、倶梨迦羅谷に死体の丘が築かれたことも、比叡山の群衆が延暦寺の繁栄、天台座主の面目のように見えたことも、両人物にとっては現在の自分たちと直接関係のない、興味深い昔のエピソードにすぎないわけである。

筆者は、天草本の～テゴザルには、例(18)～(21)のように過去の事態を示す用法と、例(22)～(25)のように現在に結びつけられた以前の動きを示す用法とがあり、語りの中の会話文では後者の場合が多く、しかもそのときは前者の場合と異なって、～テゴザッタに置き換えられなかったのではないかと考える。これは、語りの中の会話文に現れる～テゴザルが、どれも～テゴザッタに置き換えられないということではない。語りの中の会話文でも、(13)の１例のみとはいえ～テゴザッタが用いられていたし、また天草本の、

(28)　なかなかこなたのお文を御覧ぜられてこそ，いとどおん思ひはまさらせられてござる．硯も，紙もござないによって，お返事にも及ばれず：ただ心ばかりで果てさせられてござる．（p.92、有王→俊寛）

のような～テゴザルは、語りの中の会話文に現れるけれども、過去の事態を示す形式の～テゴザッタに置き換えられそうである（過去の出来事の一方的報告）。しかし、語りの地の文では～テゴザルと～テゴザッタとが同じ程度に用いられている一方で、語りの中の会話文では～テゴザッタが殆ど用いられていないという事実を説明するためには、やはり上のように考えるのが最も妥当であると思う。

以上の考察に従って、現在から切り離された過去の事態を示す意味を〈過去〉、現在に結びつけられた以前の動きを示す意味を〈完了〉と呼ぶことにする。

２．３　しかし、天草本平家物語の～テゴザルに〈完了〉を表す用法があったとする上の結論は、主として同資料に見られる例の解釈から導かれたものであった。そのような意味が〈過去〉を表すのとは違うとハビヤンに意識されていたということは、その場合の～テゴザルが～テゴザッタに置き換えられないという形式的特徴によってはじめてわかるのである。この特徴は同資料での～テゴザルと～テゴザッタの現れ方から間接的にうかがわれたが、それだけでは証拠としてやや弱い印象を否めない。〈完了〉を表す、～テゴザッタに置き換えられない～テゴザルがあったことを、より直接的に示す事実は見つからないであろうか。

実は、それに関わるのが２．２で少しふれた、「～ときこえ（まらし）てござる」という形式なのである。すでに明らかにされていたことであるが[注14]、この形式は「～と申す」「～ときこえ（まらし）た」とともに、語りの地の文に現れるけれども、その大半が対応する表現を原拠本にもたず、単に「両人相対して雑談をなすがごと」き体裁をとるために用いられたものであって、出来事を述べる語りからは浮き上がっている。

(29)a.　猪俣近平六範綱・平家方ニ聞ユル・越中前司ヲハ・此ウコソ討ト・高ラカニ名乗テ・其ノ日ノ・高名ノ・一ノ筆ニソ・付ニケル（斯道文庫本、p.540）

b.　平家方にきこゆる越中の前司をば猪俣かうこそ討てと，高らかに名のって，その日の高名の一の筆につけられたと，申す．（天草本、p.275）

(30)a.　サレトモ痛手ナラネハ・頭ヲ裹ミ・弓打切テ杖ニツイテ・南都ノ方ヘゾ落行キケル（斯道文庫本、p.278）

b.　されども痛手でなかったれば，あたまをひっつつんで，弓を打ち切って杖について，南都の方へ落ちゆいたと，きこえまらした．（天草本、p.128）

(31)a.　此ノ声々ノ・耳ノ底ニ留ツテ・西海ノ旅ノ蒼及モ・吹風ノ音ヘ・立波ノ音ヘニ付テモ・只今聞様ニコソ・思ハレケレ（斯道文庫本、p.461）

b.　この声どもが耳の底にとまって，西海の旅の空までも吹く風の声，たつ波の音につけても，ただ今聞くやうに思はれたと，きこえてござる．（天草本、p.187）

そして、少数ながら対応する例の、原拠本での表現は諸形式の間に共通である。

(32)a.　上人是ヲ幡ニ縫ヒ・長楽寺ノ正面ニ・掛ラレケルトソ承ル（斯道文庫本、p.677）

b.　上人これを幡にぬうて長楽寺の正面にかけられたと申す．（天草本、p.353）

(33)a.　申スマテモ無ク・鑣テ賜ツテンケレハ・六条河原ニテ斬ニケリ・カクテ維栄・甲斐々々敷・頼レケルトカヤ（斯道文庫本、p.742）

b.　申すまでもなうやがて賜はったれば，六条河原で切って，緒方はかひがひしう頼まれたと申す．（天草本、p.379）

(34)a.　折節灯サヘ消テ・牙ニ質ヲ相見ルコト無シテ・泣々別レケル<u>トソ承ル</u>（斯道文庫本、p.590）

b.　をりふしともしびさへ消えて，たがひに姿を相見らるることもなうて，泣く泣く別れられた<u>ときこえた</u>．（天草本、p.303）

(35)a.　有声ニ・ワタクシニハ・得思ヒ立スシテ・宮ヲスヽメ進セタリケル<u>トカヤ</u>（斯道文庫本、p.258）

b.　なましひに私にはえ企てられず，宮をすすめ参らせられた<u>ときこえた</u>．（天草本、p.117）

(36)a.　黒田ガ弓筈ヲ・巌ノ迫ニネヂ立テ・掻キ上リツヽ・二人ヲモ引上ケテ・助タリケル<u>トカヤ</u>（斯道文庫本、p.283）

b.　黒田が弓の弭を岩のはざまにねぢたてて，かきのぼって二人をも引き上げて助けた<u>と，きこえてござる</u>．（天草本、p.131）

上の天草本の諸形式は、互いにほぼ等価な表現であると認められ、物語に対する話し手（喜一検校）の伝聞の立場を表す。「～ときこえ（まらし）た」「～ときこえ（まらし）てござる」と、動詞の現在形の「～と申す」とが置換可能であるということは、前者の「時制」が「現在」である（現在の事態が問題になっている）ということを示している。したがってそれらの形式は、「～と聞こえました」ではなくて、「～と（世に）聞こえています」とでも解釈すべきものなのである。

天草本平家物語には、「～ときこえ（まらし）てござる」は24例見られるが、「～ときこえ（まらし）てござった」は１例も存在しない。これを偶然でないとするならば、「～ときこえ（まらし）てござる」は〈完了〉（この場合は平家物語が世に広まった意）を表す、～テゴザッタに置き換えられない～テゴザルの実例であるということになる。

３　他の資料の～テゴザル・～テゴザッタ

３．０　２．２で記述した天草本平家物語の～テゴザルと～テゴザッタの文法的意味は、その他の中世語資料に見られる～テゴザル・～テゴザッタにもあてはまるようである。本章ではこのことについて述べてゆく。

３．１　まず～テゴザッタの用例を検討しよう。天草本平家物語以外の資料から得られるものは、２．０でもふれたように、次の５例である。

(37)　シヤント言はるるは、「さてそれを受け取つてから何ともそれは言はなんだか」と問はるれば、「何をも申す事はござなかつたれども、心の

中には一段と深い御大切の程を喜ぶ体が見えてござつた」と申した。
（天草本伊曽保、p.421、イソポ→シヤント）

(38)　また、ある時、人の内の者が物を売りに余が所へ来れば、盗うだ物と存じながら、その価は浅う言われたによって、すなわち買いまらしてござった。二匁ばかりの物でござった。（懺悔録、p.46、信徒→神父）

(39)　また、させらぬ地盤に踏み懸って、大事なる人のことについて邪推の心が起って、定めてその分であろうとも存じ、人にも申し入れまらして、その人も我と同心せられてござった。（同、p.50、信徒→神父）

(40)　〔主〕先度より聞けば、気相気と聞いて、気遣い思いまるしたが、何処を痛ましらるたか。顔を見れば今にも気相気の色が御座る程に、構えて御養生さしられ。〔客〕忘れまるして御座った。病中に珍らしい薬をぢやうに下されて、御蔭に食びまるして、其れより痛みまるした胸と腹が些と止みまるして、次第に直る様に御座れども、本には好う御座らん程に、今にも気遣いまるする。（捷解新語、三３）

(41)　〔大名〕「それに付て今思ひ出いた、もり山は蚊の名所にて、昔もかの精がすまふをとつたなどゝ、おさなひの昔物語に云程に、もし蚊精では有まひか　〔太郎冠者〕「仰らるれはさやうでござる、森山には今におひて、人ほどな蚊〻有と申、殊にさいぜん見まらしたが、口が長ふなつてござつた（虎明本狂言、蚊相撲、上 p.199）

これらを見ると、例(38)を除いて（自らの犯した罪を現在から切り離して述べたとするのは疑問）、いずれも話し手の個人的回想の表白、聞き手に対する過去の出来事の一方的報告といった性格をもっている。回想性の点では、さきの天草本平家物語の例(13)とも共通しており、また例(40)、(41)には、「現在はその結果が残っていない」という含みさえあるように感じられる。すなわち、(40)では船酔いの薬の礼を述べなければならないことを一旦忘れたが、現在は相手に言われて気づいたのであり、(41)では大名と蚊の精とが相撲を取っていた時に蚊の精の口が長くなったけれども、現在は元に戻っていて見た目にはわからないわけである。

以上のようなことから、他の資料の～テゴザッタも、おおむね天草本平家物語に見られる～テゴザッタと同様、〈過去〉を表す形式であるといえよう。

３．２　次に～テゴザルを見ることにすると、天草本平家物語以外の用例のなかにも、やはり〈過去〉を表わしているとはいいがたい、

(42)　又その奥な石に五つの文字が有つたをイソポが見て言ふは、「所詮こ

の黄金をばシヤントも取らせられな、その故はここに又石に五字書いてござる……」と言うたところで（天草本伊曽保、p.420、イソポ→シヤント）

(43) （下六）「もの申 （烏帽子屋）「たそ （下六）「先度あつらへた、ゑほしはいできてござるか （烏帽子屋）「中々いできてござる、今少うるしが干ぬに依て、此ことくにいたひて置て御ざる、もつてかへらせらるゝ間に、はやひまらせう（虎明本狂言、麻生、上 p.157）

などの、〈完了〉を表わしていると解釈されそうなものが存在する。さらに、以下の外国資料の例では、対訳ラテン語、朝鮮語が現在形になっている[注15]。

(44)a. なかなか、多分デウスのお事をば知りまらしてござる。（懺悔録、p.6、信徒→神父）

b. *Ita est profecto: magna ex parte hac notitia* ***calleo.*** （同、p.7）

(45)a. そうあるならば、真にデウス要らざる儀をばめされたと見えてござる。（同、p.10、神父→信徒）

b. *Si res ita se habent:* ***videtur*** *Deusrem impertinentem fecisse* （同、p.11）

(46)a. ただその浅い科に当る過怠は、有に無に、この世界にかプルガトリョにか、勤めいで叶わぬと心得まらしてござる。（同、p.14、信徒→神父）

b. *sed poena quae correspondet huiusmodi culpae veniali est necessarium persoluere vel in hac vita vel in purgatorio. hoc est quod quantum ad hoc* ***intelligo.*** （同、p.15）

(47)a. さりながら、その公事の相手のせられた損は、二・三十目ほどと覚えてござる。（同、p.26、信徒→神父）

b. *litis autem materia erat triginta argenteorum quos perdi dit ille cum quo habita est lis secundum quod modo* ***recordor.*** （同、p.27）

(48) 〔客〕然うあるに、長老の寺に朝鮮の御牌を置いて、常々節句の日毎に拝礼を為まるする。〔主〕然う召さるを島中行き通いに見て、人毎に語るを聞いて、朝廷もいかう感じさしられてこそ御座れ。（下線部対訳朝鮮語 'ir-k'ɐ-rɐ-si-nɐ-ni-'i-ta）（捷解新語、三16）

(49) 〔客〕仰しらる所を今朝奉行衆へ談合したれば、御進物も御城へ上らしらる日、先へ持たせて並べ立てた後に、信使が御座る様に為たらば好そうなと申す程に、其の分判事衆にも申してこそ御座る。〔主〕然うあらば、ともかくも仰しらる次第に為まるせう。（下線部対訳朝鮮語 ni-rɐ-nɐiŋ-'i-ta）（同、七20ウ）

これらも、～テゴザルに〈完了〉を表す用法があったととらえることによって、合理的に説明されよう。つまり、日本語としては以前の動きをもち出す形式であるが、問題になっているのは現在の事態であるという意味を写すために、外国人が現在形の対訳語をあてたと考えたいのである。

3．3 天草本平家物語の～テゴザルと～テゴザッタの文法的意味はまた、他の資料に～テゴザッタがあまり見られないことの理由をも暗示している。神父に対して罪の赦しを乞う告解の記録や、日本との交易に必要な会話の教科書や、典型的な対話劇である狂言の台本に、現在から切り離された過去の事態を示す形式が現れにくいのはむしろ当然である。そのような資料に見られる～テゴザルは、大多数が～テゴザッタに置き換えられない、〈完了〉を表すものなのではないかと思われる。～テゴザッタが用いられやすいのはやはり物語であって[注16]、さきの例(37)、(39)～(41)のように、それをあえて通常の対話の中で用いたときには、回想性や今に結果が残っていないといった含みが出てくるのであろう。

4 おわりに

現代日本語における文末の動詞の過去形（～タ）に、本稿で言うところの〈過去〉と〈完了〉の意味があることはすでによく知られており、最近では前者を〈定過去〉、後者を〈現在パーフェクト〉と呼ぶテンス－アスペクト研究も見られる[注17]。この両者が区別される客観的な証拠は結局、問答で答が否定の場合に、あるときは～（シ）ナカッタとなり、あるときは～（シ）テイナイ／（シ）ナイとなるという事実である[注18]。

(50)a. きのう昼飯を食べたか〈過去〉。いや、食べなかった。

b. もう昼飯を食べたか〈完了〉。いや、（まだ）食べていない／食べない。

一方中世語の～タにも、〈過去〉と〈完了〉の二つの意味があったと解釈の上から推定される。

(51) さんざんにし散らいて，喜びの興をつくって，六波羅へ帰ったれば：清盛これを聞いて，ようこそしたれ〔完了〕と，ほめられた〔過去〕．（天草本平家、p.17）

しかし、もともと～タではなくて～テゴザッタとなっていれば、〈過去〉であると一義的に決定される（～テゴザルとなっているときは、依然として二義的である）。すなわち、尊敬／丁寧体の場合には、〈過去〉と〈完了〉の区別が半ば顕在化するわけである。

注１　拙稿「ロドリゲス日本大文典の不完全過去について」（『詞林』９、1991・４）。なお、本研究は筆者の平成元年京都大学大学院文学研究科修士論文に基づいている。

注２　本稿でとりあげる～テゴザル・～テゴザッタには、尊敬体の場合と丁寧体の場合とがあるけれども、その相違は論旨に影響を与えないので、特に区別しなかった。

注３　池田廣司・北原保雄『狂言集の研究　本文篇』上中下（1972—83）に拠る。

注４　清瀬良一「天草版平家物語の原拠覚書」（『国文学攷』33、1964・３）など。

注５　慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『百二十句本 平家物語』（1970）に拠る。

注６　「動詞未然形＋助動詞ルル・ラルル、スル・サスル」を含む。

注７　寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』（1984）pp.184-216。

注８　ただし文末の～テゴザルであっても、次の２例は命令形なので考察の対象としない。命令文の述語は、いわゆる平叙文や疑問文の述語とは異なって、テンスをもたないと考えられるからである。

① 先づ御辺伸び上つて前足を井の側（かは）に投げ掛け、頭（かしら）をも前へ傾けてござれ（天草本伊曽保、p.490）

② 一人も残らず申し受けたいと申す程に、然う心得なされてこそ御座れ。（下線部対訳朝鮮語 'a-rɐ-syo-syə）（捷解新語、六22）

例②では対訳朝鮮語が 'ar-ta「知る」の命令形になっている。初本捷解新語の対訳朝鮮語の解釈は、主として辻星児「原刊「捷解新語」の朝鮮語について」（『国語国文』44—２、1975・２）に拠った。

注９　注７寺村1984、pp.187-189。

注10　鈴木博「天草本平家物語小考——特に百二十句本平家物語との対比を通して——」（『国語国文』43—９、1974・９）。

注11　安田章「コソの拘束力」（『国語国文』49—１、1980・１）。

注12　原拠本と無関係な雑談に現れる～テゴザルは、５例とも、

③　ＶＭ.とてものことに平家に対しておこされた謀叛の起りをまちっとお語りあれ．ＱＩ.かしこまってござる（p.13）

④　右馬の允(じょう).して重盛はこのことについて清盛へ異見をば召されなんだか？　ＱＩ.なかなか教訓を召されてござる．その様体(ようだい)をも語りまらせう．（p.30）

のように喜一検校の台詞であるが、③などは〈完了〉を、④などは〈過去〉を表わしていると解釈される。

注13　この事実は、～テゴザルと～テゴザッタとが形態上は現在形と過去形の対立でありながら、意味の面ではそのようにとらえられないことを示している。語りの地の文に現れる～テゴザルと～テゴザッタについても、形式が異なる以上、意味に何らかの違いがあった可能性は十分に考えられる。しかし、例(14)～(17)のような～テゴザッタと、例(18)～(21)のような～テゴザルとがどう違うのか、客観的な証拠を挙げて説明することは、今のところ不可能である。もし両者の間に違いがあるとすれば、それはもはやテンスやアスペクトの問題ではないと思われる。また、語りの地の文で用いられている～テゴザルはいわゆる歴史的現在ではないかという疑いもあるけれども、41例中38例までがピリオドをともなっているところから見て、その可能性は低い（注14安田1981参照）。

注14　安田章「「語り」の表現機構――中世の場合――」（『表現研究』34、1981・９）。

注15　例(44)b.の calleo「知る」と(46)b.の intelligo「認識する」は能動相の、(45)b.の videtur（<video「見る」）は受動相の、(47)b.の recordor「思い出す」は形式受動相の、いずれも直説法現在形。例(48)の ʻir-kʻɐ-rɐ-si-nɐ-ni-ʻi-ta（<ʻir-kʻɐt-ta「ほめたたえる」）、(49)の ni-rɐ-nɐiŋ-ʻi-ta（<ni-rɐ-ta「言う」）を現在形と見ることについては、注８辻1975参照。

注16　天草本伊曽保物語には相当数の～テゴザッタが見られるはずなのに、会話文に現れる(37)の１例のみであるのはなぜかという疑問が残る。これは、～テゴザル・～テゴザッタが当時としてきわめて鄭重な言い方であり（ジョアン・ロドリゲス原著、土井忠生訳註『日本大文典』1955、p.597）、天草本伊曽保物語の地の文が、天草本平家物語における語りの地の文ほど鄭重な文体をとっていないからである（伊曽保の９例の～テゴザルも、すべて会話文に現れる）。この、きわめて鄭重な文体による物語という天草本平家物語の

特徴が、「両人相対して雑談をなすがごと」き問答体から来ていることはいうまでもない。

注17　工藤真由美「現代日本語のパーフェクトをめぐって」（言語学研究会編『ことばの科学　3』1989）。ただし本稿の〈完了〉には、工藤の言う〈現在パーフェクト〉だけでなく、〈（現在の）結果持続〉も含まれることになるので、完全には重ならない点がある。

注18　寺村秀夫「‘タ’の意味と機能――アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ――」（岩倉具実教授退職記念論文集出版後援会編『言語学と日本語問題』1971）。

（敬称略）

付記

本稿は、平成２年国語学会秋季大会（高知大学）での口頭発表をまとめ直したものである。その席上、貴重な御意見・御質問をいただいた江口正弘氏、榎木久薫氏、大鹿薫久氏、金水敏氏に、厚くお礼申し上げたい。また筆者が大阪大学文学部に研究生として在学の間、懇切な御指導・御助言を賜った前田富祺教授、山口堯二教養部教授、高山善行氏に深く感謝する。

（ふくだ・よしいちろう　大阪星光学院中・高等学校教諭）